

短期海外研修中の学生の文化への適応の過程

上 野 直 子

Cultural Adjustment of Junior College Students on the Oversea's Program

Naoko UENO

I. はじめに

本学英語科では英語教育の一環として希望者を対象に、1987年から米国カリフォルニア州サンフランシスコ郊外で、また1988年には英国ロンドン郊外にもプログラムを広げ約3週間の海外研修を実施して、87年には42名(英語科1年生)、88年には米国に42名(英語科1年生41名、保育科1年生1名)、英国26名(英語科1年生22名、英語科2年生3名、国文科1年生1名)の参加を得た。学生の研修中の生活の様子や環境への適応の過程を観察するために、筆者も87、88年共に学生と同様に米国人の家庭にホームステイして米国海外研修の全てのプログラムに参加した。

筆者の観察に加えて、(1)研修をはさんで行われた定期試験の成績の変化の調査、(2)学生の英語科目を直接指導している外国人講師への聞き取り調査、(3)学生自身の研修の評価に関するアンケート調査を行った結果、ホームステイ体験がきっかけで、①英語を聞き取る力に効果が現れたこと、②外国人と話をするときの抵抗が軽減されたこと、③積極的になり学習意欲がわいたこと、④国際情勢や日本の文化、社会情勢に関心を持つようになったことがわかった。(上野, 1988)この調査で短期海外研修は、今後の学習の動機付けという点では大変効果があることが認められ、このことは教育上大きな意義があると思われる。また後の人生で具現化するかもしれないこの経験の潜在的効果も見逃せない。しかし英語の習得に関しては聞き取りの力に多少の効果があつた以外は、あまり大きな成果を得られなかったのは残念であつた。そこで本稿では、米国研修に参加した学生の米国滞在中の英語習得や精神的な変化の過程を紹介し、研修の英語力への効果を上げるための考察を行う。

II. 研修の内容

この研修プログラムは、米国西海岸各州を中心にホームステイプログラムを運営する教育機関CHI (CULTURAL HOMESTAY INSTITUTE) の企画で行われた。プログラムの内容は、各々の学生が米国人の一般家庭に滞在しながらCHIの米国人講師による英語の授業を受けたり、社会見学や観光、地域の人々と伝統芸術の交歓会を行ったりして、米国の文化、習慣、風俗を体験するというものである。学生の滞在先はCHIがその地区でプログラムに関心を持ち、社会的に信用

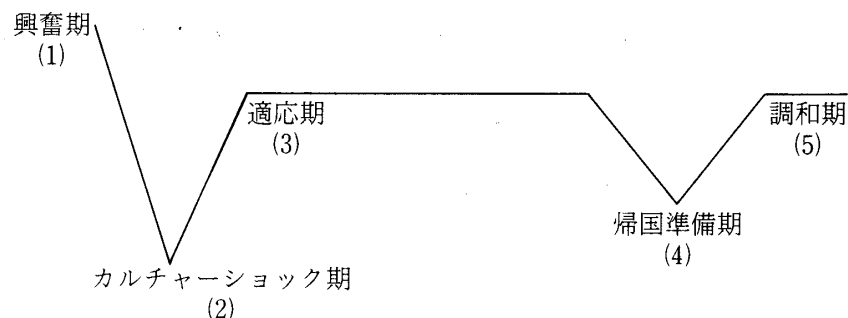
のある家庭を選択し、受入れを依頼した。それぞれの受入れ先は、学生が日本から送った自己紹介文、本人の写真、学生の趣味や家族構成、両親の職業などを書いた個人調査書をもとに、お互いの趣味や嗜好が一致するようにと決められた。ホストファミリーは、中流家庭の4人家族というところが主であったが、人種やホストファーザー、ホストマザーの職種は様々であった。

授業は、日本人と米国人が合作したCHIのオリジナルテキストを使用して行われた。このテキストは、現地での生活に最低限必要な英会話や米国の通貨、税金、地域の社会福祉施設の利用法などの知識の紹介から順次ステップを踏んで、米国の習慣や文化、社会情勢などを学べるように考案されており、テキストの中から学生の発話量を増やすために、学生が日本のことを家族に紹介しながら自らも米国のことを尋ねるような内容の宿題が毎日課された。

III. 学生の実環境への適応の過程

長期留学の学生が、第二言語の環境に適応する過程にはパターンがあることが知られている(Levine et al., 1982)が、本学の学生の英語習得や精神的な変化を筆者が観察し、ホストファミリー、ティーチャーコーディネイター(T/C)の話と総合したところ、三週間の短期滞在の場合にも適応の過程に一つのパターンがあることがわかった。勿論その周期や過程に多少の個人差はあるが、一般的なパターンは下記のとおりである。以下にそれぞれの過程を説明する。

図1. 学生の実環境への適応の過程



(1) 興奮期 (到着から1～2日目)

この時期まだ耳が慣れていないために、かなり英語力のある学生でも“What’s your name?”, “How old are you?”のような簡単な質問すら理解できず、ホストファミリーとの意志疎通は極めて困難で、新しい単語やフレーズも全く耳に入らない様子であった。それにもかかわらず念願がかなって外国へ来た喜びや、見るもの、体験するもの全てが新鮮であることから、滞在期間中精神的に最もハイな時期。

(2) カルチャーショック期 (3～5日目)

慣れない長旅や、新しい環境や生活への戸惑い、家族と意志が通じないことによるフラストレーション、極度の緊張などによる心身の疲労のため、この時期ホームシックをはじめ多数の病人がでた。1～2日目にかかなり意志疎通ができていた学生も含めてほとんどの者が、耳を閉ざしてしまい英語の理解が大変困難な様子であった。

(3) 適応期（6～16日目）

心身の疲れがだんだんと取れて生活習慣や家族とも慣れてくる6日目くらいから、学生は全体的にリラックスして、授業の中でも家族に対しても明るくオープンになって、授業にも積極的に参加するようになる。またホストファミリーへの遠慮も少なくなつて、たどたどしい英語で日本の文化や習慣などを説明する努力をするようになる。意志疎通にはまだかなりの困難が伴うものの、耳はだんだんと慣れてきて、ネイティブスピーカーが言っていることを注意深く聞くようになる。そしてさらに慣れてくると、聞き覚えた新しい単語や短いフレーズを自分で使ってみるようになる。

それまではホストファミリーの日本人学生向けのピジョンイングリッシュ¹しか聞く機会がなかった学生も、1週間を過ぎる頃からは、ファーストフードの店で注文したり、バスに乗ったり、買物をするのが苦にならなくなつて、ぐっと行動範囲が広がることによって、耳にする英語の質は向上し、英語のインプット量が急激に増加するにもかかわらず、新しい単語や短いフレーズを覚えるのは、この時期には全く苦痛にならない様であった。またこの時期に覚えたことばは、実生活で覚えたものだけに帰国後もしっかりと記憶に残っているようである。

(4) 帰国準備期（帰国前1週間～5日）

エキサイティングな毎日を過ごす中、この楽しい期間もうすぐ終わること、打ち解けて本当の家族に対するような愛情を芽生えさせたホストファミリーと別れなければならないことからくる精神的な苦痛、思うように英語が上達していかないことによる自信喪失などの理由で、ホストファミリーや英語に対して距離を開けるようになる。これまで大変熱心にプログラムに参加してきた学生も含めてほとんどの者が、英語を覚える意欲をなくして、授業中やホストの前で日本人同志日本語のおしゃべりに夢中になったり、日本人の友達と買物に行ったり、家に帰っても自宅に閉籠りがちで、かたや少なくなった滞在期間を有意義に過ごさせてあげようとするホストファミリーとの間にトラブルが最も多かった時期。この時期にも病人が続出した。

(5) 調和期（帰国前4日目～最終日）

生活のリズムができ、習慣や食事、言葉やホストファミリーにすっかり慣れて、この時期学生は精神的に最も安定してくる。クローズダウンした者も、最後の数日間を充実させるために再びオープンになる。特に熱心な学生は、長期留学の夢を抱き始め、実際にホストファミリーの手助けを受けて留学のための資料集めに奔走したり、近くの大学や短大を見学している様子であった。このような学生達にとってこの時期は、耳がすっかり慣れていることと、留学のために英語を上達させたいという強い動機が相まって、滞在期間中で最も学習効果が上がっているように思われた。しかし一方今回の研修で英語習得の難しさを思い知らされた大多数の学生は、“卒業後は英語を使う機会もないから”と努力を諦めて、授業中にメモを採ることも止め、買物や観光に方向転換してしまった様であった。

IV. 考 察

以上の観察の結果、興奮期、カルチャーショック期、帰国準備期には学習の効率が悪く、適応期、調和期には効率が良いため、適応期、調和期に多くの学習内容を盛り込み、カルチャーショック期、帰国準備期には精神的にも肉体的にも負担の少ない活動を組み込むことが望ましいと思われる。興奮期には学習効率は悪いが、全てのものを享受できる時期なので、この時期にたくさん英語を聞いておくのは耳の訓練のためには重要であると考えられる。

87年及び88年の授業の授業日程を以上の観点から見ると、学習効率の悪い到着後3～5日目、帰国1週間前には観光やゲーム的な活動を取り入れ、効率の良い2週目に英語の学習活動を多く配してあるのは理想的であるが、大方の研修参加者が精神的に安定し、長期留学の夢を持った学生達が学習意欲を盛り返してくる最後の数日間に英語の学習活動がほとんど取り入れられなかったことは、英語学習の上で大きなロスになり、学習意欲の喪失を助長したようにも思われる。(資料1. 2) 調和期に英語吸収の努力を諦めた学生が多数出たことは前述したが、その時期に留学の夢を抱いていた学生達の英語学習に対する熱意も、帰国後の就職活動や英語の授業数の減少のために失われてきているのが現状である。そこで今後の課題は、まず、(1)研修の効果を高めるために学習効率を配慮した学習日程をたてること、そして、(2)研修の効果を維持するための事後教育を考へること、(3)研修の効果をさらに高めるための事前の準備を工夫することである。

V. おわりに

本稿では英語教育の立場から、研修の効果を高めるための考察を行ったが、人間教育としての短期海外研修の効果にも測り知れないものがあり、これからもぜひともできるだけ多くの学生を海外に送りたい。しかし日本人のホームステイ参加者は年毎に増えて、受け入れ先の供給が間に合わなくなりつつあるのが現状のようである。今後もこのプログラムを存続させるには良識ある日本人を送ることはいうまでもなく、米国や英国の人々の善意に甘えるだけでなく、何等かの方法でホストファミリーに貢献しなければならないことを参加者達に認識させたり、日本の方でも海外からの留学生に大きく門を開いたりする必要がある。(1988年9月30日受理)

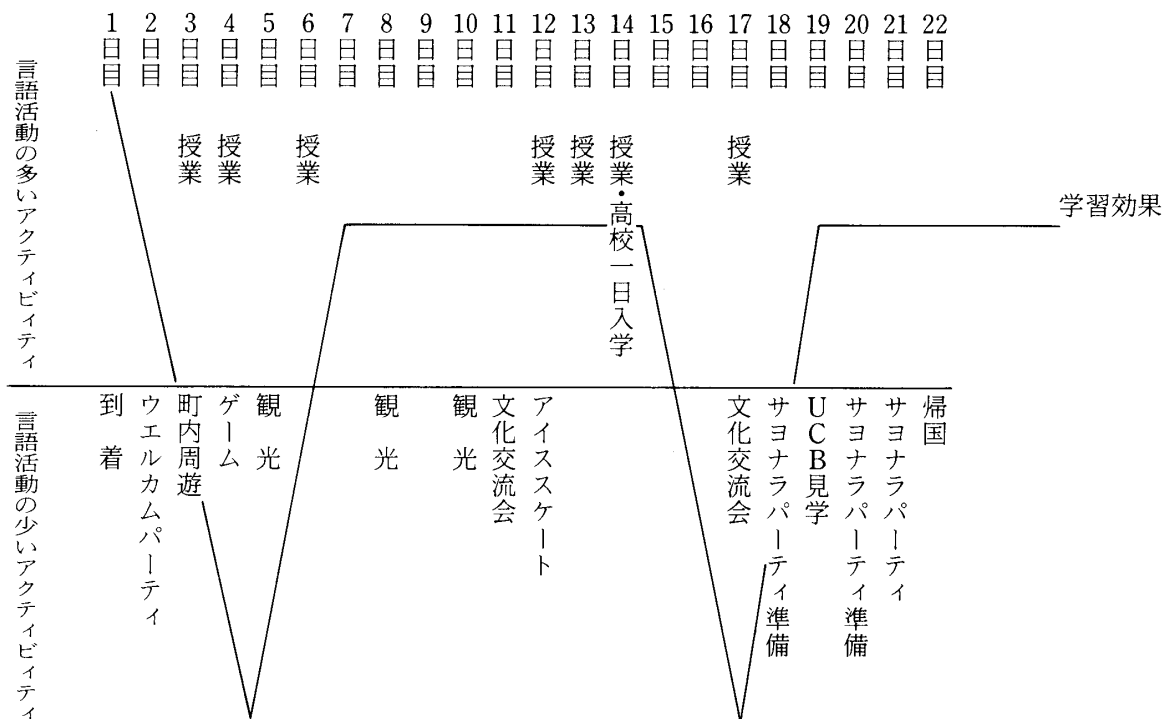
註

- 1) ホストファミリーは学生を受け入れる前のオリエンテーションで、T/Cより学生の英語習得のためにビジョンイングリッシュを使わないように予め注意されているが、現実には学生とのコミュニケーションのためにどうしても簡略化した英語を使わざるを得ないようであった。

参考文献

- Levine, R Deena., and Adelman B Mara. *Beyond Language*. New Jersey ; Prentice-Hall, Lnc., 1982.
上野直子 「短期海外研修の効果」 『九州英語教育学会紀要』 第16号 1988.

資料1 87年米国ベタルマ地区の授業日程と学習効率の関係



資料2 88年米国ベタルマ地区の授業日程と学習効率の関係

